

全身への転移を認めた犬の滑膜肉腫の一例

○ 松村雅子, 森 崇, 坂井田 誠, 山田雅人, 秋山博史, 米丸加余子,
酒井洋樹, 丸尾幸嗣 (岐阜大学)

犬の滑膜肉腫は関節や関節包の滑膜を構成する間葉系細胞に由来する犬ではまれな腫瘍である。好発部位は膝や肘の関節で、特に膝関節の末端部に発生が多い。局所浸潤性が強く、腫瘍が進行すると遠隔転移が起こる。転移部位としては、リンパ節、皮膚、胸膜、心臓、肺、胸郭、脾臓、肝臓、腎臓に報告があるものの、一頭の犬において、全身の様々な部位に転移が発生することはまれである。

犬における治療は断脚が最も効果的で、化学療法は緩和目的で、ドキソルビシンあるいはミトキサントロンとシクロフォスファミドまたはビンクリスチンが主に用いられており、ドキソルビシンとカルボプラチンで治療を行ったところ、腫瘍の縮小を認め、3年間は临床上正常であったとの報告もある。人においては主にドキソルビシンとイフォスファミド、またはドキソルビシンとダカルバジンが用いられている。ダカルバジンを犬の滑膜肉腫に対して用いた報告はない。

本症例はオス、4才のジャーマン・シェパードで左後肢の跛行のため来院した。X線検査によって脛骨の骨融解が認められ、コア生検によって骨肉腫が疑われた。胸部X線検査にて肺転移像が認められなかったため、左後肢股関節より断脚術を行った。腫瘍の病理学的検査により、二相性滑膜肉腫と診断した。その後、ドキソルビシン、カルボプラチン、イフォスファミドを用いて術後補助化学療法を行ったが、皮膚への転移を見るなど抗腫瘍効果が認められなかったため、ダカルバジンを用いたところ、皮膚へ転移した腫瘍の大きさの縮小を見たが、術後198日目に死亡した。剖検によって皮膚、歯肉、腎臓、副腎、肺、肺門リンパ節、食道、横隔膜、脾臓、膀胱、前立腺、縦隔、前頭骨、眼球への滑膜肉腫の極めて広範な全身転移を認めた。